受　動　と　完　了

——史 的 一 考 察——

志　田　　章

1.　歴史的概観

ゴート語は，印欧語に存在していた中動相を受動形として保持しているゲルマン語唯一の言語である．しかし，例えばギリシャ語では，中動相は幾つかの時称で用いられるが，ゴート語では直説法及び希求法現在に限られている．ゴート語はこの他にも幾つかの受動表現を持っていたが[1]，時称が動詞それ自体の語形では現在形と過去形のみであり，原典であるギリシャ語聖書の受動の完了形，アオリスト，未完了過去等を翻訳する別の統語形式として，ウルフィラ（Wulfila）は，wisan +Part. Prät. 及び wairþan+Part. Prät. を用いた．このように受動態は新しい分析的（analytisch）形式を与えられたが，能動態はこの形式を持たず，過去の出来事はすべて過去形（Präteritum）が用いられた．つまり，wisan/wairþan は比較的早く助動詞的使用を見出したが，haban や aigan は当時まだ，そのような使用形態を持っていなかったのである．E. バンヴェニストは「一般言語学の諸問題」の中で，〈haben〉について次のように書いている．「どの地域の言語にしても，〈mihi est 私には……がある〉が〈habeo 私は……を持つ〉型に優越することを確かめるのは　だれにとってもしごく簡単なことである」，「語彙素としての〈have〉は，広い世界の中では希有な存在であって，多くの言語は，そのようなものをもっていない．印欧諸語の中においてさえ，それは，遅れて，のちに獲得されたもので，その普及には，時を要したし，今なお全般には及んでいない」[2]．

しかし，500年ほど後に書かれた古高ドイツ語の「タツィアーン」（830年頃成立）及び「オトフリート」（870年頃成立），そして古ザクセン語の

「ヘーリアント」(830年頃成立) においては wesan(sîn)+Part. Prät. と uuerdan/uuerðan+Part. Prät. だけではなく，habên/hebbian + Part. Prät. もかなり使われ始めている．さらに，ゴート語には見られなかった，wesan による自動詞完了形，そして，10〜11世紀の古高ドイツ語には，habên の自動詞完了形が見られるのである．

古英語では初期の段階から，受動態は beon/wesan か weorþan と動詞の過去分詞の組み合わせで，また完了形は，最初，habban, beon/wesan + Part. Prät. の形式で表され，後には habban が自動詞とも結び付くようになった[3]．

ところで，ゴート語では，分析的受動形式における過去分詞は，意味上の主語に合わせて形容詞の強弱の両変化をするのに対し，古ドイツ語や古英語においては，それは変化しないほうが多い．過去分詞は次第に形容詞の特徴を失い，助動詞との結び付きが一層緊密になっていく．そこで以下では，過去分詞の格変化に注目し，主に，古ドイツ語における受動態及び完了形の成立状況について述べてみたい．

2. wisan/uuesan + Part. Prät.

(a) 過去分詞が他動詞の場合

ゴート語の wisan, wairþan + Part. Prät. において過去時称が多いのは現在時称は中動相が表すからだ，という J. グリムの見解に対して，H. ゲーリングは，ギリシャ語原典の受動・現在形が，wisan の現在形と過去分詞で表されている例を挙げ，反論している[4]．また，W. シュトライトベルクは，原典とゴート語訳の時称の不一致に関して，文法的正確さが文体的均整の犠牲になりうることが，考慮に入れられねばならず，また，ウルフィラの翻訳技術は，原典の表面的形式をできるだけ忠実に再現することに甘んじず，思想の忠実な再現を，特に強調している，と書いている[5]．ゲーリングは，ウルフィラの訳業を讃えるべき例の一つとして次の箇所を挙げている (Gering 1874, S. 412).

J 13, 31	qaþ þan Iesus : nu *gasweraids warþ* sunus mans, jah guþ *hauhiþs ist* in imma	*λέγει οὖν ὁ Ἰησοῦς. νῦν ἐδοξάσθη ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώ-που καὶ ὁ θεὸς ἐδοξάσθη ἐν αὐτῷ*

ギリシア語原典では，どちらもアオリスト・受動であるが，ウルフィラは区別している（der Menschen Sohn wurde verherrlicht [in diesem Augenblick : nu], und Gott ist in ihm erhöht [in Ewigkeit]). gasweraids は弱変化動詞 gasweran の過去分詞・男・単・主であり，直訳するなら，この瞬間に人の子は賛美された者になった，ほどの意味であり，次の文の hauhiþs は弱変化動詞 hauhjan の過去分詞・男・単・主であり，直訳するなら，そして神は彼（＝キリスト）において高められた者である，ほどの意味であろう．

しかしながらゲーリングは，シュトライトベルクの見解を否定する例証を続いて提示している（Gering 1874, S. 414).

Mc 1, 9	Jah warþ in jainaim dagam, qam Iesus fram Nazaraiþ Galeilaias jah *daupiþs was* fram Iohanne in Iaurdane	*καὶ ἐγένετο ἐν ἐκείναις ταῖς ἡμέραις ἦλθεν Ἰησοῦς ἀπὸ Ναζαρὲθ τῆς Γαλιλαίας καὶ ἐβαπτίσθη ὑπὸ Ἰωάννου εἰς τὸν Ἰορδάνην*

daupiþs は弱変化動詞 daupjan 過去分詞・男・単・主で，直訳するなら，そして，それらの日々に，次のことが生じた．イエスが，ガリレアのナザレから来て，ヨハネによって，ヨルダン川で洗礼を受けた者であった，ほどの意味であろう．だが，下線部は，「洗礼を受けた者になった」となるはずの所で，wisan の過去 was は wairþan の過去 warþ に置き換えられるべきであろう．この他にも，検討すべき問題は多くあるが，ゴート語においてwisan 受動の過去分詞は屈折を示し，明らかに形容詞である．従って，ウルフィラの本意は不明だが，wisan 受動は当然ながら状態を

表すことになる．次の表1のアオリスト・未完了過去109例も，シュレーダーに拠るなら，現在或いは過去における何らかの状態として解釈できるのである（Schröder 1993, S. 248ff.）．

表　1　(Ibid., S. 173)

Griech.	Präs.	Imperf.	Aor.	Perf.	Plusqu.
ist + Part. Prät.	5	0	50	50	0
was + Part. Prät.	0	17	42	42	5

次に，古ドイツ語を見てみよう．概略をつかむために，表2～5を参照しながら述べたい．

表　2[6]

	Tat.	Otf,	Hel.
flek.	83	29	8
unflek.	296	141	125
%	22%	17%	6%

表　3

		Tat.	Otf.	Hel.
男	単	—	5	—
	複	46	15	8
女	単	—	2	—
	複	8	—	—
中	単	—	4	—
	複	27	—	—

散文である『タツィアーン』（以後 Tat. と表記する）と頭韻の『ヘーリアント』（以後 Hel. と表記する）の統計は，かなり信頼できるだろう．しかし，脚韻の『オトフリート』（以後 Otf. と表記する）のそれは，単に押韻のために使われている可能性があるので，注意する必要がある[7]．表3から，Tat. と Hel. における過去分詞の屈折は，複数のみだが，Otf. では，すべての性の単数形でも屈折していることが分かる．表4と5は，Oft. で

表　4

	押　韻	押韻以外
Unflek.	91	50

の過去分詞の押韻状況を示している．無屈折の過去分詞は，約65%が押韻で使われているが，屈折しているそれは，17%に留まっている．これは，格変化が単に押韻のためではないことを支持しているかもしれない．つまり，ゴート語に顕著だった形容詞の特徴をまだ失っていないのである．そして，表2から，この特徴は Tat. において最もはっきりと現れ，Otf. ではやや失われ，Hel. では，屈折している過去分詞の占める割合は，6%にまで減少し，古ザクセン語の uuesan 受動形の統語的定着を示している．また，Tat. において uuesan 受動形が多用されているが，これはラテン語の影響と考えられる．Otf. の過去分詞の屈折には強変化が多いが，それは弱変化が指示性の強い表現だからであろう．しかし，それ以上に，Tat. と Hel. においては，単数強変化に屈折している過去分詞がないことから，Otf. での単数強変化は押韻或いは，リズムの関係であることも予想される．

先にも触れたが，Tat. と Hel. で過去分詞に語尾があるのは，主語が複数の場合のみである．そして無語尾の過去分詞のうち，主語が複数であるのは，Tat. で296例中27例，Hel. で117例中7例と極めて僅かであり，Otf. でも，29例中15例が複数である．

表 5

flek.	押韻		押韻以外	
	単	複	単	複
男 強	1	3	4	12
弱	—	—	3	—
女 強	—	—	2	—
弱	—	—	—	—
中 強	1	—	3	—
弱	—	—	—	—
合 計	5		24	

次に，古ドイツ語の uuesan/sîn + Part. Prät. の意味を調べてみよう．ここでは，屈折している過去分詞を含む例に限った[8]．

(1) inti thio dar garauuo uuarun ingiengun mit imo zi theru brutloufti, inti bislozzano uuarun thio duri (Tat. 148, 6)
(2) riobe sint gisubirite (64, 3)
(3) fon hinana sint fimui ziteilte (44, 22)
(4) soso arlesene sint thie beresboton inti in fiure furbrennit (76, 4)
(5) quemet zi mir alle thie giarbeitite inti biladane birut (67, 9)

(1)「そして準備ができていた人達は，彼と共に婚礼の中へ入って行って，そしてドアが閉められた」及び(2)「らい病患者は清められた者になる」は，明らかに，事象を表している．また(3)「今後5人は分かたれた者になるであろう」は，ズィーヴァースが指摘しているように未来を表している．(Sievers 1966, S. 500). (4)「雑草が引き抜かれ，そして火で焼かれてしまうように」は，現在完了を表しているであろう．(5)「汝ら疲れさせられ，そして荷を背負わされた者達はすべて，私のもとに来なさい」は，ゴート語であったように，状態を表し，過去分詞は形容詞的に使われている．

次は Otf. の例である．

(1) Ist sedal sinaz in himile gistataz; (1-5-47)
(2) Nu birun wir gihursgte zi gotes thionoste, (2-6-55)
(3) sie warun er firlorane, nu sint fon gote erborane. (2-2-30)
(4) wanta ist gibet thinaz fon druhtine gihortaz, (1-4-28)

(1)「彼（＝キリスト）の王座は，天に置かれている」は，状態を表しているであろう．(2)「今我々は促されよう，神の勤行へと」において J. ケ

レは gihursgte に，形容詞 hurtig, geschäftig の訳を当てている[9]．(3)「彼らは以前堕落した者であった，今神から再び生まれて来た」においても，firlorane は形容詞的であり，次の erborane の文は完了の意味が強いように思われる．(4)「なぜなら，汝（ザカリア）の祈りは，主によって聞き入れられたからである」．過去分詞 gihort は，中・単・主の格語尾 -as を取り，韻を踏んでいる．意味は完了と考えたほうが良いと思われる．

今度は，Hel. の例を見てみよう．

(1) ‚kumad gi,' quiðid he, 'thea thar gikorene sindun, endi antfâhad thit craftiga rîki, (4392)
(2) thea liudi sind farlorane, farlâten habbiad (3003)
(3) Nu sint thîna gesti sade,/sint thîne druhtingos druncane suîðo, (2060-1)

(1)「『来なさい』」と彼（キリスト）は言う，「『選ばれ，そして天国を受け取る者達は』」．gikiosan の過去分詞 gikoran に複数・主格の語尾 -e が付いている．前後関係から考えるなら未来の意味と解釈できる．(2)「その人々は永遠の罰を下された者であり，（支配者の言葉を）見捨てた」．farlorane は Otf. の例文(3)の firlorane と同じく，形容詞的であり，H. ゼールトは firloran を verdammt, der Hölle verfallen と訳している[10]．(3)「今やあなた（マリア）の客人は満ち足りています／あなたの婚礼の来客はとても酩酊しています」．drinkan の過去分詞 drunkan は，ゼールトでは，能動の意味を持つと説明されている．Tat. では truncan が名詞的に使われているが（147, 12），Otf. にはその用法は無く，drunkanen という自動詞がある．ゴート語においては，gi- は，完了などを意味する接頭辞であったが，古ドイツ語では過去分詞にも付けられるようになった．しかし，もともと完了の意味を含んでいる動詞の過去分詞は gi- なしで作られた．ゴート語には jah þan sums gredags sumzuþ-þan drugkans ist (I. K. 11, 21)「そして一方である者は空腹であり，他方である者は酩酊している」があり，drugkans ist は状態の

受動としてよりも，たびたび指摘してきたように，形容詞句と見なされるべきだろう．しかし，古ドイツ語においては uuesan 受動の過去分詞は drunkan/truncan に見られる単なる形容詞の単位と uuesan と結んで動詞句を形成するものとが共存している．古ドイツ語の過去分詞の接頭辞 gi- は形容詞的であった過去分詞に事象的意味を与え，uuesan の本動詞性を奪い助動詞化を押し進めたと考えられる．今見た例文の意味が一定していないのも，古ドイツ語がこの統語的変化の過渡期にあるからであろう．

(b) 過去分詞が自動詞の場合

W. ヴィルマンスは，『ドイツ語文法』の中で，ゴート語においては wisan と自動詞の組み合わせによる完了形が想定されうる，と述べ，次の例を挙げている．

(1) silba *uswahsans ist,* ina fraihniþ (Jh. 9, 21)
(2) sô baurgs alla *garunnana was* at daura (Mc. 1, 33)

ヴィルマンスは，(1)「彼は大人になっている，彼に尋ねなさい」の文の uswahsan は現代語の erwachsen のように，述語として使われているが，(2)「町のすべての住民は入口の前に集まっていた」の garunnana は，動きを表す動詞の過去分詞であり，それゆえウルフィラは garunnana was を過去を表す複合時称と感じていたであろう，と主張している[11]．これに対して，シュレーダーは，なるほどそれは動詞的構造（verbales Gefüge）と理解されうるであろうが，発展した能動の過去完了の例証と考えるのは難しい，というのも，例証がこの1例だけしかなく，ウルフィラは wisan と他動詞の過去分詞による受動形式を，むりやり自動詞にも適用したのだ，と反論している．だが他方では，自動詞の分析的動詞形式の普及の糸口を見つけることができる，と付け加えている（Schröder 1993, S. 36）．

しかし古ドイツ語においては，ゴート語での存在が疑わしかった，uuesan と自動詞の完了形も，Tat. で15例，Otf. で36例，Hel. では65例

表 6[12]

	Tat.		Otf.		Hel.		Beo.	
	sg.	pl.	sg.	pl.	sg.	pl.	sg.	pl.
flek.	0	3	2	1	0	13	0	0
unflek.	11	1	31	2	36	7	12	0
合 計	15		36		56		12	

表 7

	押 韻	押韻以外
flekt.	3	0
unflekt.	9	24

確認される．また，ベーオウルフには13例ある．過去分詞が屈折している割合は，Hel. が約25%，Tat. が20%，Otf. が約 9 %である．ベーオウルフの13例は主語がすべて単数形であり，屈折しているかどうか不明である．しかし，G. ホフマンの 統計 によると最終期に書かれたものを除く古英語21作品の主語が複数形である過去分詞の屈折率は，125例中117例，約94%とかなり高い数値である（小野／中尾1980, 377ページ）．Hel. の uuesan による受動形の過去分詞の屈折率は 6 %であったが，それと比べると，ここでの Hel. の屈折率は高く，古英語との 類似性を感 じさせる．しかし Tat. で20%であった 屈折形過去分詞の 割合は Otf. では 9 %に減少している．つまり 統語的完成度は Otf. では uuesan 完了形 において高く，Hel. では uuesan 受動において 高いことが 分かる．Tat. においてそれの占める割合は両形式とも20%前後である．

また，表 6 が示しているように，Tat. と Hel. の屈折形過去分詞の格語尾はすべて男性複数である．しかし，表 7 から分かるように，Otf. にもそれは 3 例（男・単・複・主・強：-er, -e が 1 例ずつ，中・単・主・強：-as が 1 例）あるが，すべて押韻で使われている点は留意する必要がある．

次に，具体的な例を見ていこう．

(1) uuanta *arstorbana sint* thie thar suohtun thes knehtes sela (Tat. 11, 1.)

(2) ‚ih wille iu iz zllen,‘ quad er, ‚er: *ist* Lazarus *bilibaner* (Otf. 3-23-50.)

(3) sprach er odo deta waz, thaz *was* al *githiganaz*
(Otf. 2-4-22.)

(4) bihuuî gi *sîn* te thesun lande *cumana,* (561. Hel.)

(5) Nâh *sind* hêr *gesetana* burgi/managa mid meginthiodun:
(Hel. 2825-6.)

(1)「なぜなら，その子（キリスト）の魂を狙っていた者達は，死んでしまったからである」．複数の格語尾 -a の付いた過去分詞 arstorbana は，形態的には形容詞の屈折をし，名詞的に使われているとも考えられる．その場合は，「死んでしまった者たち」ほどの意味になるだろう．(2)「『私（キリスト）は汝らに言いたい』と彼は言う『既に，ラザロは死んだ』」．過去分詞 biliban に男・単・主・強の語尾 -er が付き，前詩行の er と韻を踏んでいる．ここも名詞的（死んでしまった者）にも取れる所であろう．(3)「彼（キリスト）は話しそして行った，完全無欠であるあらゆる事を」．githihan は過去分詞 githigan での例証しかなく，形態的にも意味的にも形容詞として使われ，was と韻を踏んでいる．(4)「なぜ汝ら（東方の賢人たちは）はこの国に来たのか」．間接話法の希求法 sîn と複数形（-a）に屈折している cumana で完了形を成していると考えられるが，やはり，cumana は形態的には形容詞あり，「来た者たち」くらいの訳も理屈上可能であると思われる．また，Hel. では屈折している過去分詞13例のうち9例が cumane, -a である．その他 Tat. では，無屈折の過去分詞12例の内10例が uuerdan の過去分詞（gi)uuortan であり，Otf. では36例の内 queman が9度，irstantan（auferstehen）が4度使われ，uuerdan は1度だけに留まっている．(5)「この近くにはお城がある，多くの人々が住むたくさんの城が」では，gesetana はゼールトの訳では angesessen, bewohnt sein とあり（Sehrt 1966, S. 458），また F. ゲンツマーの訳では Nahe sind hier Burgen, gar vielbevölkerte とある[13]．いずれにしても，gesetana は sind と結ぶ完了形とは考えられない．ところで，古ドイツ語では uuerdan/uuerðan と自動詞の完了形も使われ，一般に事象を表す．今見た例文(1)(4)も事象を表す解釈も可能であり，両形式の意味の競合が見られる．ここでも，uuesan 受動と同様に統語形式と

意味の関係は多様である．

3. wairþan/uuerdan/uuerðan + Part. Prät.

(a) 過去分詞が他動詞の場合

シュトライトベルクは，ゴート語の受動形 wairþan + Part. Prät. で用いられる他動詞は，完了相のそれに限られる，と述べている（Streitberg 1891, S. 106）．しかしシュレーダーは，けっして完了相を含んでいない動詞 merjan が wairþan と使われている例（T 1, 3, 16 merids warþ in þiudom）及び完了相の動詞が wisan と使われ，逆に完了の意味を弱められている例を挙げ反論している（Schröder 1993, S. 183）．

J 9, 32	fram aiwa ni *gahausiþ was* þatei uslukiþ þas augona blindamma gabauranamma	*ἐκ τοῦ αἰῶνος οὐκ ἤκούσθη ὅτι ἤνοιξέν τις ὀφθαλμοὺς τυφλοῦ γεγεννημένου*
R 7, 6	gadauþnandans in þammei *gahabaidai wesum*	*ἀποθανόντες ἐν ᾧ κατειχόμεθα*

最初の例文は「太古から，ある者が盲目に生まれた人の目を開くということは，聞かれたことがなかった」ほどの意味だろう．シュレーダーは，シュトライトベルクが wisan の過去 + Part. Prät. は，過去において目の前で生じている行為を表す場合に適していると発言しているのに対して，そうではなく，「過ぎてしまった状態」を述べる場合に使うのだ，と主張しているが，この両者の見解のいずれにしても，gahausiþ was は状態を表し gahausiþ は was によって完了相をほとんど奪われることになる．この箇所と対応しているギリシャ語は，アオリストの過去であることからしても，それは適した用法ではないことになる．完了相を表すのは wairþan + Part. Prät. なのである．次の例文は直訳するなら「(我々は) 手に入れられてあるものによって，死につつあった」くらいの意味であろうが，前の例と同様に完了の接頭辞 ga- の意味はほとんど感じられない．

また対応するギリシャ語の箇所は，未完了である．ゴート語の wairþan +Part. Prät. は，現在及び過去の事象を表し，この事象を表すのは，過去分詞ではなく，むしろ wairþan であるというのが，シュレーダーの見解である．

なお，事象を表す受動の現在は，主に中動相が表し，waiþan + Part. Prät. の現在形は5例のみである（表7参照）．

表 7 (Schröder 1993, S. 173).

Griech.	Präs	Imperf.	Aor.	Perf.	Plusqu.
warþ+P.P.	0	7	69	4	0
wairþiþ + P.P.	5	0	0	0	0

次に，古ドイツ語の例を調べてみることにする．まず具体的な数を表7・8で見てみよう．

表 7[14]

	Tat.	Otf.	Hel.
flek.	37	15	9
unflek.	172	74	105
%	18	17	9

表 8

		Tat.	Otf.	Hel.
男	sg.	0	4	0
	pl.	20	4	9
女	sg.	0	2	0
	pl.	4	0	0
中	sg.	0	1	0
	pl.	14	4	0

表7から Hel. が屈折の割合が最も低く，Tat. Oat. はおおよそ同じであることが分かる．また，表8は，Tat. 及び Hel. の屈折は複数に限られていることを示している．Otf. の屈折している過去分詞15例の内11例が押韻の箇所で使われており，uuerdan と過去分詞の間には1語以上の語が挾まれているのに対して，残り4例つまり押韻以外の場合にはこの2語は連続して現れている（*gisceidiner* wurti, 1-1-92. *gisprochanu* wurtun 1-15-22. *biwollane* ni wurtin 4-20-5. *gihaltinu* wurti 4-29-16. 1例だ

け ni が入っているが，過去分詞はすべて強変化動詞で -n で終わっている）．これには韻律が係わっていると考えられる．いずれにしても Otf. の格変化には注意すべきであろう．

次に意味について見てみよう．

(1) Tho sie thar uuarun, *vvurðun* taga *gifulte* (Tat. 5, 13)
(2) then ir forlazet sunta, then *uuerdent* sio *forlazono* (232, 6)
(3) thaz fon Macedoniu/ther liut in giburti *gisceidiner wurti* (Otf. 1-1-91, 92)
(4) Sus mit unredinu so *wurtun* siu *bidrogenu* (1-22-17)
(5) ac *uuerðad* thar sô *farlorana* lêra mîna (Hel. 2450)
(6) folc Iudeono,/*uurðun underbadode* that sie undar bac fellun/alle efno sân (4850-2)

ゴート語でもそうであったように，古ドイツ語でも基本的には uuerdan + Part. Prät. は事象を表すと考えられるが，実際には様々な意味で使われている．(1)「彼ら(ヨゼフとマリア)がそこにいた時，出産の日々は満たされた」．これは事象を表している例と言えよう．(2)「汝らが罪を許す人々，その人々の罪は許されている」．ルター訳[15]は Wem ihr die Sünden erlaßt dem sind sie erlassen で，uuerdent forlazono は状態を表すと思われる．(3)「マケドニア人からは出生の点で区別されているということ」．この例も状態を表すであろう．(4)「このように彼ら（ヨゼフとマリア）は，誤解によって思い違いをした」．J. ケレは『グロッサール』の中で wurtun bidrogenu は中動相的意味で使われていると説明を加えている（Kelle 1963, S. 33）．(5)「そうではなく，そこでは（かたくなな心を持つ人の場合には，私が以前言ったように）私の教えは無益に使われる」．ここでは事象を表していると思われる．(6)「ユダヤの民は驚いた，それで彼らは仰向けに倒れるほど肝を潰した，皆が同じように，すぐに」．この例も(4)と同様，中動相的意味で使っている．これらの過去分詞はすべて，形態的には形容詞であるが，表 7 からも，特に Hel. においては，werden

と他動詞による受動の統語形式は，大体完成していたと推定できる．

(b) 過去分詞が自動詞の場合

ヴィルマンスが指摘しているように，ゴート語には wairþan と自動詞の過去分詞の完了形はない (Willmanns 1909, S. 143)．Otf. でも uuerdan と自動詞による完了形は使われていない．しかし，Tat. では 3 度，Hel. では 49 度使用 されている．Tat. の 3 例で 使われている 自動詞はすべて uuerdan で時称もすべて過去である．Hel. 49例の内40例まで kuman の過去分詞が用いられており，屈折形 はすべて男性・複数 である．ヴィルマンスは，この形式の 時称には 現在形 は使われていないと述べているが (Willmanns 1909, S. 143)，Hel. には現在時称で用いられている例が 9 例ある．また，Hel. において動詞 kuman はこの形式の他に，uuesan/sîn による完了形と単独の過去時称でも使用されていて，これらの間の意味の違いが問題になるがここでは触れないことにする．次に幾つかの用例を見てみよう．

表 9[16]

	Got.	Tat.	Otf.	Hel.
flek.	0	0	0	9
unflek.	0	3	0	40

(1) Tho iz aband *uuortan uuard*, quam sum man otag,
(212, 1 Tat.)

(2) Ic gisihu that gi sind eðiligiburdiun/cunnies fon cnôsle gôdun : nio hêr êr sulica *cumana* ni *uurðun* (557-8 Hel.)

(3) *uuerðad* eft iunga aftar *kumane* (3632 Hel.)

(1)「夕暮れになった時，ある裕福な男が来た」．先に述べた uuesan + Part. Prät. の完了形も，この例と同様に事象を表すことがある (Inti sinu tho erthbibunga *uuas giuuortan* michil : ルター訳 Und siehe, es geschah ein großes Erdbeben. Tat. 217, 1.)(Die Bibel 1975, S.

37). uuesan/uuerdan の完了形で使われている uuerdan の過去分詞は例外なく，無屈折である．

また，この形式は Tat. に3例あるものの，Otf. では1度も使われていない．この点，Hel. の49例は注目すべきであろう．(2)「私（ヘロデ王）は汝ら（東方からの賢人達）が高貴な生まれの者，良き一族の出自であることを知っている．以前ここには，そのような者はけっして来なかった」．nio 以下の後続文は過去形であるが，sulica が現在形の先行文の意味内容を受けているので，現在完了の意味で捉えたほうが良いと思われる．過去分詞 cumana は形態的には形容詞であり，その場合は「来た者」ほどの意味になるだろう．(3)「(月の満ち欠けのように，老人は去り）再びその後で，若者達がやって来る」．この場合の uuerðad kumane は uuerðan の意味が強く出ていて，未来の意味を表していると考えることもできる．

このように，特に Hel. において用いられている uuerðan+Part. Prät. は，統語的にはある程度の完成の領域にあるが，意味に関しては上に述べたような揺れが見られ，他の形式との意味的な競合関係が，統語との関係を複雑にしていると思われる．

4. haban/habên/hebbian + Part. Prät.

haban/habên/hebbian は，他動詞と組み合わされて完了形を形成することがある．しかし，ゴート語では，haban はまだ本動詞であり，過去分詞は目的語の述語として屈折して使われた．frauja, sai, sa skatts þeins, þanei *habaida galaginada* in fanin (L 19, 20)．直訳するなら「ご主人様，布切れの中に置かれて，私が持っていたあなたのお金を見てください」ほどの意味であろうが，ヴィルマンスは ‚den ich bewahrte, bei Seite gelegt in meinem Tuche' と訳している（Willmanns 1909, S. 144)．

古ドイツ語の habên/hebbian には，本動詞の用法と助動詞的な用法が共存し過去分詞は屈折することがあった．表10はこの統語形式での過去分詞の使用回数を示したものである．

上の表で興味深いのは Otf. においては，habên + Part. Prät. の過去分詞は無屈折であるという点，そして逆に今度は，Obj. + Präd. の述語は

表 10[17]

		Tat.	Otf.	Hel.	Beo.
habên/hebbian +P.P.	flek.	3	0	18	2
	unflek.	1	25	113	26

表 11[18]

		Tat.	Otf.	Hel.
habên/hebbian +Obj.+Präd.	flek.	7	6	15
	unflek.	0	0	0

残らず目的語に合わせて屈折しているという点である．先に挙げたゴート語と同じ箇所 L 19, 20 を Tat. は thin mna, thia in *habeta gihaltana* (151, 7) と訳している．ヴィルマンスは Tat. の habên + Par. Prät. の 4 例すべてを挙げているが，その中で無屈折の 1 例を，目的語と過去分詞の述語関係の領域が踏み越えられた例として提示している senu, nu andero fimni ubar thaz *haben gistriunit*: fünf andere habe ich gewonnen (149, 4) であって ich besitze fünf andere als gewonnene という意味ではない．Tat. の残る 3 例 (28, 1. 102, 2. 151, 7) は目的語と過去分詞の主述関係が形態的に示されているゆえに，habên は本動詞として使われている．ゴート語に見られた統語関係がここでも機能しているのである．この構造は古英語にもあり，H. スウィートは『新英語文法』[19] (1924 年) の中で次の例を挙げている hie *hæfdon* hira cyning *āworþenne*. 彼は，aworþenne は本来形容詞であり hira cyning と同格で用いられていると指摘し，次の英訳を挙げている they had their king in a state of being deposed (彼らは彼らの王を廃位された状態で持っていた)．また，ケレは habên が二重目的語を取って使われる構文の項目で，habên + Obj. + Präd. について次のように説明している：(Otf. においては) ある行為の完了後も持続しいてると考えられる状態にある，他動詞目的語を表す場合には，形容詞の他に過去分詞も置かれる．彼はその例として次の文を提示している．

er *habet* in thar *gizaltan* drost managfaltan (Otf. 4-15-55) 直訳するなら「彼〔キリスト〕は彼ら〔弟子たち〕に様々な慰めを，伝えられたものとして持った」くらいの意味だろう．Otf. のこの構文の述語部には，この1例を含む過去分詞が3度，残りの3度には形容詞が使われている．また，Tat. の同構文の述語には，形容詞が3度，過去分詞が4度使用され，Hel. では15度の内14度が形容詞で，残り1例に関しては意見が分かれている．恐らく，ゴート語で既に使用例が見られるこの構文を基にして，haben + Part. Prät. の完了形が徐々に形成されて行ったと考えられる．表10に見られるように，Otf. では，この完了形の過去分詞はすべて無屈折であり，wesan/sîn よりも後に助動詞化が始まったにもかかわらず，9世紀後半には古高ドイツ語においては，habên と他動詞による完了形は完成していたと推定される．古ザクセン語においては，過去分詞の屈折は約14%であるが，古英語では早くから無屈折の方が多い所からみても，hebbian と過去分詞の結合は確立していたと思われる．

habên/hebbian の目的語には，対格の他に属格や与格も用いられていて，その結果，habên/hebbian と目的語の結びつきが弱まり，完了形成立の一因になるとともに，O. ベハーゲル[20]が例示しているように，対格目的語の省略が行われ，一見したところ，自動詞の完了形のような構文が現れた：*Haben* ih *gimeinit* (私は決定した Otf. 1-5-39), *habet* er mo *irdeilit* (彼〔キリスト〕はかれ〔悪魔〕に判決を下したOtf. 1-5-57)．そして，一層この傾向が進み，10世紀後半から11世紀初頭にかけては *habên* は faran, gangan, queman などの変移動詞 (mutative Verba) にまで侵入している ich *habo gefaren* Notker ps. 31. 1. さらに，O. エールトマン[21]によると，12世紀にかけては habên は受動にまで使用幣囲を拡げているのである wande aller der zorn unde elliu die vientscaft, diu under menschen unde under gote was, mit dir zesuone *hat braht* (なぜなら人類と神の間にあった怒りと敵意すべてが，あなたによって，和解へともたらされたからである *Diemer,* Deutsche Gedichte des 11. und 12. Jahrhunderts S. 298)．また Hel. でも hebbian と変移動詞による完了形の例が見られることを付言したい Sô thiu frî *haƀdun/gegangan* te them gardon.....thuo thar suôgan quam/engil thes

alouualdon obana fan radure（婦人達が庭へ行った時，そこに全能なる者の使いが，羽の音を響かせながら，天からやって来た 5794-97）.

（続く）

注

1 ギリシャ語の受動に対応するものとして，(1)-nan で終わる起動動詞（Inchoativa），(2)再帰代名詞による表現，(3)似た意味の自動詞や他動詞などが用いられた．Schröder, Werner: *Zur gotischen und althochdeutschen Grammatik*, Stuttgart 1993, S.7.

2 E. バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』，河村正夫他訳，みすず書房，1983，182ページ及び184ページ．

3 小野茂／中尾俊夫『英語史 I』（英語学体系 8），大修館書店，1980，374～380ページ及び，389～392ページ．

4 H. Gering: *Über den syntaktischen Gebrauch der Partizipia im Gotischen*; in *Zeitschrift für deutsche Philologie* Bd. 5, Halle 1874, S. 409. 2K. 1, 4. 7, 4. Gal. 4, 20. Eph. 2. 22.

5 Streitberg, Wilhelm: *Perfektive und imperfektive Aktionsart im Germanischen*; in: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* Bd. 15. Tübingen 1891, S. 81f.

6 紙面の都合上屈折している過去分詞が使われている箇所だけ挙げることにしたい．以下も同様である．*Tat.* n. pl. m. 7,2. 13,6.21. 14,4. 23,2. 33,2. 34,3. 39,1.2. 44,1.22. 64,3. 67,3.6(2).9. 69,7. 70,2.76,4. 84,77. 93,1. 98,3. 100,6(2).109,3(2). 125,9.11. 127,3. 129,9. 131,17. 136,1. 141,8. 142,1. 145,4.9.16. 146,5.147,7. 174,4. 192,3. 209,2. 217,4. 218,1. 222,4. 230,4. 244,1. n. pl. f. prol, 1. 40,2. 54,6. 125,11. 138,13(2). 148,6. 234,6. n. pl. n. 7,7. 40,20. 45,4. 65,1. 65,2(2).4(2). 67,8. 84,4.99,4.105,2. 116,2. 119,12. 125,6. 132,6. 135,30. 138,3. 141,3. 145,12. 146,4. 182,5. 185,9. 208,1. 224,3. 229,3. 234,2. acc. sg. m. 4,12. n. sg. f. 78,9. *Otf.* n. pl. m. H, 137. 1-11-23.56. 1-22-39. 2-2-30(2). 2-3-3. 2-6-55. 3-14-67. 3-26-36. 4-5-11(2). 4-29-6. 5-16-40. 5-20-67. 5-23-264. n. sg. m. st. 1-4-36. 1-11-9. 3-20-163. 3-24-86. 5-11-23. n. sg. m. sw. 1-4-2. 1-10-3. 2-12-2. n. sg. f. st. 4-28-8. 4-29-14. n. s. n. st. 1-4-28. 1-5-47. 5-18-12. 5-25-86. *Hel.* n. pl. m. 18. 2061. 3003. 3218.

3319. 4392. 5118. 5747.

7 例えば，後に触れる述語的用法の現在分詞94例の内，押韻で使われているのは91例にも上る．O. エールトマンもこの点を指摘している．Erdmann, Oskar: *Otfrids Evangelienbuch,* Halle 1882, S. 350.

8 ゴート語及び古ドイツ語の引用文は次のものに拠った．Streitberg, Wilhelm (hrsg.): *Die gotische Bibel,* Heidelberg 1971. Sievers, Edward (hrsg.): *Tatian,* Paderborn 1966. Erdmann, Oskar (hrsg.): *Otfrids Evangelienbuch,* Tübingen 1965. Behaghel, Otto (hrsg): *Heliand und Genesis,* Halle 1948.

9 Kelle, Johan: *Glossar der Sprache Otfrids,* Aalen, 1963. S. 190.

10 Sehrt, Edward H: *Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis,* Göttingen 1966. S. 344.

11 Willmanns, Wilhelm: *Deutsche Grammatik,* Straßburg 1909, S. 143.

12 *Tat.* n. pl. m. 7, 1. 11, 1..n. pl. n. 148, 5. *Otf.* n. pl. m. 1-4-51. n. sg. m. st. 3-23-50. n. sg. n. st. 2-4-22. *Hel.* n. pl. m. 351. 561. 633. 1228. 2027. 2825. 3427. 3703. 4458. 4932. 5228. 5610. 5869.

13 Genzmer, Felix: *Heliand und die Bruchstücke der Genesis,* Stuttgart 1989, S. 91.

14 *Tat.* n. pl. m. 2, 11. 5, 13. 7, 8. 13, 12. 21, 2. 22, 11. 39, 1. 44, 12. 54, 9. 78, 9. 80, 6. 81, 2. 94, 2. 99, 4. 111, 3. 112, 2. 153, 3. 161, 3. 176, 3. 211, 1. n. pl. f. 54, 4. 145, 13. 232, 6. n. pl. n. 2, 9. 4, 4. 6, 5. 13, 25. 71, 2. 3. 83, 2. 98, 3. 119, 12(2). 185, 5. 209, 2. 240, 1. acc. pl. n. 85, 4. *Otf.* n. pl. m. 1-12-4. 1-17-73. 4-20-5. 5-11-19. n. pl. 1-15-22. 1-20-6. 1-22-17. 2-6-19. n. sg. m. 1-1-92. 1-10-1-10-1. 3-20-83. 3-20-82. 3-21-3. n. sg. f. 1-12-16. 4-29-16. n. sg. n. 3-21-17. *Hel.* n. pl. m. 12. 17. 2450. 3526. 4851. 5673. 5761.

15 *Die Bibel nach der Übersetzung Luthers,* Stuttgart 1975, S. 122.

16 *Hel.* n. pl. m. 558. 2225. 2729. 3632. 3964. 4400. 4466. 4825. 5873.

17 *Tat.* acc. sg. f. 28, 1. acc. 151, 7. acc. sg. m. 102, 2. *Hel.* acc. pl. m. 56. 294. 1267. 1326. 1482. 2903. 3032. 5414. 5865. acc. pl. f 2990. 5746. acc. sg. m. 755. 991. 1152. 1959. 3793. 4147. 5165.

18 *Tat.* acc. pl. m. 124, 6. 127, 3. 146, 5. acc. sg. m. 79, 2. 123, 2. 125, 3. 4. *Otf.* st. acc. sg. m. L. 79 (Adj.). 4-15-55 (P. P). st. acc. sg. f. 1-4-53 (P. P). st. acc. sg. n. 3-24-93 (Adj.). 3-7-54 (P. P). sw. acc. sg. n.

2-11-45 (Adj). *Hel.* st. acc. sg. n. 273. 1595. 2023. 2324. 2831. 2998. 3440. 3739. 4698. 5206 以上 garu (Adj.). 929 (garo). 3325 (Adj). 2570 (gihaldan, Inf. od. P. P.). st. acc. sg. f. 3012 (Adj.).

19 Sweet, Henry: *A New English Grammar,* Oxford 1924, S. 86f.

20 Behaghel, Otto: *Deutsche Syntax* Bd. 2, Heidelberg 1923. S. 274f.

21 Erdmann, Oskar: *Particip des Präteritums in passivischer Bedeutung mit HABEN statt mit SEIN verbunden*: in *Zeitschrift für deutsche Philologie* Bd. 20, Berlin 1889, S. 226.

<その他の参考文献>

Piper, Paul: *Otfrids Evangelienbuch. Mit Einleitung, erklärenden Anmerkungen, ausführlichem Glossar und einem Abriß der Grammatik,* 2 Teil, Freiburg 1887.

Das Passiv und das Perfekt

—— geschichtlich betrachtet ——

Akira SHIDA

Die Verba *haben, sein* und *werden* sind heute als Hilfsverben gebraucht. Aber in *der Gotischen Bibel,* die in der zweiten Hälfte des 4. Jahrhunderts von einem Bischof namens Wulfila geschrieben wurde, scheint die Stellung der drei Verben als Hilfsverben zweifelhaft zu sein, denn Partizipia Präterita in *haban/wisan/wairþan* +Part. Prät. sind dekliniert wie Adjektive. Darum konnten sie in diesen syntaktischen Formen nur als Adjektive empfunden werden. In einem gotischen Satz „gaaiwiskoþs wairþa" ist einerseits das Partizip *gaaiwiskoþs* vermutlich für „ein Beschämter" und andererseits das Verbum *wairþa* für ein Vollverb gehalten worden. Vor allem war das Verb *haban* von der Verwendung als Hilfsverb noch weit weg.

Im Altdeutschen lassen sich mehr zusammengesetzte syntaktische Formen gebrauchen als im Gotischen. Auch *habên/hebbian* fanden ihren Weg zum Hilfsverb schon im *Tatian:* senu, nu andero fimvi ubar thaz haben gistriunit (149, 4). Dieser Satz bedeutet augenscheinlich nicht: „ich besitze fünf andere als gewonnene, was der ursprüngliche Sinn der Verbindung war, sondern: fünf andere habe ich gewonnen." (Willmanns 1922 S. 144 f.). Darin erreichte das Partizipium Präteritum „gistriunit" den Bedeutungsübergang vom Zustand zum Vorgang. Im *Otfrid* gewann das Verb *habên* als Hilfsverb eine feste Stellung, denn all die Partizipia Präterita, die mit *habên* zusammengesetzte Verbalformen bilden, sind nicht dekliniert. Im *Heliand* wird das Verb *hebbian* in den Perfekt-

umschreibungen viel mehr gebraucht als in *der Gotischen Bibel* und im *Tatian*. Während es im *Tatian* nur 4 und im *Otfrid* 25 Beispiele dafür gibt, finden wir im *Heliand* nicht weniger als 131 heraus. Bemerkenswert ist, daß im *Heliand* Intransitiva mit *hebbian* zusammengesetzte Verbalformen konstruieren, im *Tatian* und *Otfrid* dagegen nicht: So thiu fri habdun/*gegangan* te them gardon (5795). Im Althochdeutschen wurden die mutative Intransitiva, die Verben der Ortsveränderung (z. B. gehen, kommen) sind und regelmäßig mit *wesan/sîn* verbunden werden, erst im 11. Jahrhundert gebraucht: ich habo *gefaren* (Notker ps. 31, 1).

Im Altdeutschen lassen sich die Verben *wesan/sîn* nicht nur zur Passivumschreibung, sondern auch zur Perfektumschreibung benutzen. Die Partizipia Präterita, die sich mit *wesan/sîn* verbinden, sind oft dekliniert. Die Zahl der Partizipia Präterita zur Passivumschreibung ist: im *Tatian* 380 (83 dekliniert), im *Otfrid* 170 (29) und im *Heliand* 125 (8). Im *Tatian* und *Heliand* sind all die deklinierten Partizipia Präterita bis auf zwei Plural. Diese Passivumschreibungen bedeuten bald Zustand, bald Vorgang. Die Zahl der Partizipia Präterita zur Perfektumschreibung ist: im *Tatian* 15 (3), im *Otfrid* 36 (3), im *Heliand* 65 (13). Im *Tatian* wird das Verb *uuerdan* an 10 Stellen benutzt und im *Heliand kuman* an 22 Stellen. Auch diese Perfektumschreibungen bedeuten bald Zustand, bald Vorgang.

Die Verben *uuerdan/uuerðan* gebraucht man sowohl zur Passivumschreibung als auch Perfektumschreibung. Die Zahl der Partizipia Präterita zur Passivumschreibung ist: im *Tatian* 209 (37, alle sind im Plural dekliniert), im *Otfrid* 89 (1) und im *Heliand* 114 (9, alle sind im Plural dekliniert). Diese Umschreibungen bedeuten bald Zustand oder Vorgang, bald Futur. Die Zahl der Partizipia Präterita zur Perfektumschreibung ist: im *Tatian* 3 (0), im *Heliand* 49 (9, alle sind im Plural dekliniert), doch im *Otfrid*

gibt es keine Beispiele. In diesen syntaktischen Verbindungen finden wir im *Tatian* nur das Verb *uuerdan*, im *Heliand* nur das Verb *kuman*.

Das allmähliche Erlöschen der Deklination der Partizipia Präterita weist auf die Schwächung ihres adjektivischen Charakters und ihre stärkere Verbindung mit den Hilfsverben. Das Gotische hat als einzige germanische Sprache Reste des indogermanischen Mediopassivs in passivischer Verwendung bewahrt (W. Streitberg). Aber sie sind auf den Indikativ und Optativ des Präsens beschränkt. Diese Beschränkung bringt die Notwendigkeit hervor, daß Wulfila andere passivische Formen gebrauchen mußte. Die synthetischen Verbalformen gingen Schritt für Schritt in analytische über. Im Altdeutschen verdrängen diese Verbalformen schließlich die synthetischen Bildungen.